効果 身近な地域のよさと 地球上の環境問題を再確認

世界の多様性を実感することにより、自分たちの住んでいる地域がいかにすばらしいところなのかを知り、この地域の豊かな自然を大切にしていこうという意識が高まっている様子が見られた。また、カナダ側から発表のあった「害虫による松の立ち枯れ」については、後日、子供たちから「ニュースで、日本でも同じ問題が話されていたよ」と反応があるなど、同じような環境問題が地球上どこでも起きているのだということを実感しているようだ。

どんぐりの中のどんぐり虫を調べる子供たち

課題 つながりから生まれる環境教育で 地球全体を考える心を育みたい

大きく分けると次の3点の課題や注意点が挙げられる。

1 専門家との連携をいかに見つけるか

本校では、「地域素材を活かし本物とふれあう」を大切にし、教材の開発を行っている。その中で、専門家や研究機関とのつながりを得た。ただ、そのような専門家は数多くいないと考えられるので、その連携を見つけることが難しいと考えられる。

2 実際に調査できる環境であるか

本校は前述のように、教育活動において大変恵まれた環境下にある。子供たちには、実際に自分たちで調査することで、様々な発見や気付きが点として生まれる。その後の学習展開で、その点としての発見や気付きがつながり、実感を伴った理解になっていく。座学だけでの理解や、バーチャル体験ではない、本物の出会いがあってこそ、活動が意味付けられていくように思われる。

3 海外の相手との関係

1. まずは交流してもらえる相手を見つけることが必要。さらに、こちらの意図を理解し、同意してもらうことが重要である。そのためには、実際に会って話をすることが大切である。
2. 相手校のネット環境も重要な要素となる。
3. 事前での打ち合わせも、メールでのやりとりとなるが、時差の関係により返信がくるまでに時間がかかるので、初めから細かな計画を伝える必要がある。
4. 学期制の違いがある。日本は４月スタート、海外の多くは９月スタートが普通だ。学期始めの慌ただしさがひと段落し、交流できる時期を考えると10月下旬から２月という時期に限定されてしまう。相手校のタイミングも考えて、カリキュラムを組んでいく必要がある。

ＮＰＯ法人から指導を受ける子供たち

雪の上の生きものの痕跡を調べる

大人でも解決できない環境問題を子供たちに教えることだけが「環境教育」ではない。あまり大きな課題から扱うと「総論賛成、各論反対」の状態になり得る。まずは身近なことを調べて学習していくことにより実感を伴って理解し、「環境を愛し、大切にしていこう」という意識が育まれるということが大切だ。身近な環境に対しどう行動すべきかを考えることが、環境教育の入り口であると考え、そこから扱う範囲を次第に広げることが、最終的には「地球全体の環境」を考えられる人を育てていくことにつながると信じている。

雪の下からミミズを発見し驚く子供たち

今後 より多く 世界中の学校と交流を

今後は、交流する相手を増やしていきたいと考えている。より多くの世界中の学校と交流することによって、それぞれの地域の環境と生態系のつながりを知り、生物多様性をさらに実感していけるだろう。世界中の子供たちがつながることにより、互いの地域環境や文化を尊重しあえる子供たちに育てていきたいと願っている。

また、より多くの専門家から学ぶことで、自分たちの住んでいる地域の環境がすばらしいということを再認識し、価値づけることができるような学習に発展させていきたい。そうすることで地球環境に対する思いが深まり、大切にしていこうという意識につながっていくと思う。

本物から学ぶということは、子供たちに新たな物の見方を与えることができ、世界中の環境の大切さを見直し、尊重していこうという意識を育てていくことが大切である。

カナダサーモン交流団のみなさん

広げよう つなげよう 環境学習の輪

実施校から メッセージ

環境教育はまず、環境について問題意識をもつことから始まります。そして、環境を保護し、保全していく意識を育てていくよう進めていきます。

しかし、実際には人間が高次の存在で、人が何かをしていかなければいけないという意識で進んできたのではないでしょうか。

これからは、今まで学んできた人間の知恵として、自然を尊重し、共存していこうと環境教育にシフトしていくべきだと思います。そのためにはまず、自分たちの住んでいる地域の環境が好きになり、それを守り尊重していこうという意識を子どもの中に育てていく環境教育であるべきだと思います。

狭い見方で大切な素材を見落としてしまわないよう、地域環境を見直し、地域の環境素材を教材化し、単元を構成していくことが大切であると思っています。